

校 園 名： 神 戸 大 学 附 属 幼 稚 園

所 在 地： 〒673-0878 兵 庫 県 明 石 市 山 下 町 3 番 4 号

電 話 番 号： 078-911-8288

記 載 日： 2017 年 5 月 20 日

記 載 者： 田 中 孝 尚

記 載 者 役 職： 副 園 長

貴校の校風、おおまかな特色について

○9年一貫教育課程の開発・実践を核とする幼小一体化

文部科学省「研究開発学校」の指定（平成25～28年度）を受け、「グローバルキャリア人の基本的な資質の育成」を目標とする幼小9年間を見通した教育課程の開発・実践に取り組むことにより、教育研究面における幼小一体化を実現している。さらに、教員の人事交流及び初等教育キャンパス構想等により、組織・運営面での幼小一体化も推進しており、“初等教育学校”とでも言うべき初等教育の拠点校を目指している。



貴校の卒業生の活躍状況について

追跡調査はしていない。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について

追跡調査はしていないが、附属幼稚園において把握している状況は次の通り。

人事交流を行なっている職員は、市立幼稚園に戻り、教育研究及び研修においてリーダー的な役割を担っている職員がいる。また、教育委員会においては指導主事、園長会においては、神戸市や兵庫県国公立幼稚園園長会長の役割を担ったり、全国幼児教育研究会の副会長の役割を担ったりしてきた職員もいる。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて

○カリキュラムによる保育の可視化

平成 22 年度から 24 年度の文部科学省研究開発の指定を受け、幼小をつなぐ幼児期のカリキュラム「神戸大学附属幼稚園プラン」を創造し、10 の方向 40 の道筋で幼児教育を可視化するカリキュラムを提案している。詳細な観点から、3 年間の幼児教育を可視化したカリキュラムを活用して保育の見直しを凶っている地域がある。小学校教育関係者にも、幼児教育で大事にされていることが分かりやすいという声も頂いている。また、保護者にも子どもの育ちの道筋がよく分かり、家庭でのかかわり方において参考にされているという声が届いている。幼児教育関係者や小学校教育関係者、保護者から、幼児教育において大事にされていること理解しやすいカリキュラムとなっている。

さらに、平成 25 年度より、附属小学校とともに研究開発学校の指定を受け、積み上げてきた研究の成果により、平成 28 年度は新プランを提案する。ここでは、資質・能力ベースの幼小一体のカリキュラム、日々の実践が教育課程のカリキュラムの充実につながっていくシステム、資質・能力が絡まり合いながら学んでいる過程を示す記録、接続期の教育のあり方など、これからまさに必要とされている諸課題への本園の提案を示すことを予定している。

○ドキュメンテーションによる保育の可視化

平成 23 年度より、保育の一部や数日間、数週間の継続した子どもの遊びをストーリーとして切り取り、写真や子どもの言葉や動きに担任が解説を加えながら、子どもの学びの過程をドキュメンテーションとしてまとめる取組を継続している。これらは、子どもの経験の振り返りとなったり、親子で一緒に幼稚園での生活を話すきっかけになったり、保護者に幼稚園での子どもの遊びの重要性を理解してもらうことに効果を上げている。また、子ども同士、子どもと教師が、それぞれの願いや考え、互いに必要な情報を共有しながら活動を展開するためのドキュメンテーションにも平成 24 年度より取り組んでいる。これらを平成 27 年度からは、保護者を対象にホームページでも公開している。

○参加型研修会「幼児教育を考える研究会」の継続実施

子どもにとって、遊びの楽しさ・面白さとは何なのか、保育参観や保育ビデオの視聴を通して、遊んでいる子どもの事実をじっくりと見て、子どもが何を楽しい・面白いと感じているのか、何を学んでいるのかをとらえていく参加型研修会を継続して実施している。

本研究会においては、本園の研究及びカリキュラムマネジメントに実際に使用している「学びのカード」を活用している。「学びのカード」とは、子どもの学びを子どもの事実に基づいて捉えていくためのツールである。このツールを活用し、子どもの事実をいかに捉え、その事実をどのように解釈して子どもの学びを捉えるのか、さらには学びの要因を明らかにし、効果的な環境の構成や教師の援助を見出すものである。実際に記録を通して学ぶ。また、記録したものを活用しながら、協議することを通して、子どもの事実の捉え方、解釈の仕方の幅を広げる。さらに、事実に基づく子どもの学びを捉えた際に学びの要因から、環境の構成や教師の援助についても協議することを通して、自身の保育における環境の構成や教師の援助の引き出しを増やすことを体験的に学び合うということを行なっている。

本研究会においては、参加することで互いに学び合うと共に、研修方法を持ち帰ってもらい、各幼児教育関係者の研究・研修に使ってもらうことを大事にしている。実際に、指定研究を受けた園が、研究の手法として、また研究会の持ち方として取り入れている報告を受けている。

○保護者と共につくる幼稚園

幼稚園の様々な環境整備に保護者の力を借りながら取り組んでいる。平成 28 年度からは、理想の園庭づくりを目指して、協力を得ている。自園のカリキュラムに則って今ある環境を活かしつつ理想の園庭づくりをしようとすると、自ら創りだすよりほかない。環境づくりを主に担うのは幼稚園の職員であるが、そこに保護者の力を借りることで、より大胆なことをスピーディーに行うことができる。本園の取組を参考にしてもらうことで、少ない予算で各園の園庭の改造に寄与している。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか

本園で開催している参加型研究会である「幼児教育を考える研究会」において、兵庫県内のみならず全国から定員を超える参加者がある。本園の研修・研究方法やカリキュラムの可視化の手法は、兵庫県内及び近隣の府県に持ち帰って取り入れられている。さらに県内外の教育委員会主催の研修会・研究会、学会、近隣の私立大学より依頼を受け、講師派遣を行なっている。また、随時参観・研修・近隣私立大学の事前実習・教職実践演習を受け入れている。教育研究・研修・実習と幼児教育の拠点校としての様々な役割を果たしている。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について

本園では長年カリキュラム研究や参加型研修会を行っており、日本の幼児教育及び地域の幼児教育の向上に資する取り組みを継続してきている。2000年以降の具体は次のとおりである。

年度	研究テーマ	参加型研究会「幼児教育を考える研究会」テーマ
2000 (平成 12)	平成 12～14 年度 文部科学省研究開発学校指定(第 1 年次) 「社会を創造する知性・人間性」を育むことをめざした新しい教育システムの開発	
2001 (平成 13)	平成 12～14 年度 文部科学省研究開発学校指定(第 2 年次) 「社会を創造する知性・人間性」を育むことをめざした新しい教育システムの開発	<全 3 回> ① 「人とのかかわり」に着目した保育を考える ② 子ども理解とことばかけ ③ 幼稚園教員の資質向上
2002 (平成 14)	平成 12～14 年度 文部科学省研究開発学校指定(第 3 年次) 「社会を創造する知性・人間性」を育むことをめざした新しい教育システムの開発	<全 5 回> 「幼稚園教員の資質の向上と保育設計」～自分の保育を振り返りカリキュラム修正に生かす～ ① 自らの保育から学ぶ ② 自らの保育から学ぶ ③ 幼児期の発達を見る視点：子どもの“自分づくり”と保育の課題 ④ 3 歳児「遊具・遊び・環境・友達・教師とのかかわりの中で、安定して遊んでいる子どもの姿」 4 歳児「子どもの人間関係とよりよい関係作りに必要な教師の援助」 ⑤ 生活発表会について
2003 (平成 15)	社会を創造する知性・人間性」を育むことをめざした新しい教育システムの開発	<全 5 回> 「幼稚園教員の資質の向上と保育デザイン」～自分の保育を振り返る～ ① 援助の在り方を考える～初めての集団生活で～ ② 遊びの中の学びを考える ③ 「人とのつながり」に関する発達を考える ④ 援助のあり方を考える～教師の動きから～ ⑤ 発表会のあり方を考える
2004 (平成 16)	社会を創造する知性・人間性」を育むことをめざした新しい教育システムの開発	<全 2 回> 「幼稚園教員の資質の向上と保育設計」～自分の保育を振り返る～ ① 遊びの中の学びを考える 2～数・かたち・量・空間の視点から～ ② 発表会のあり方を考える 3～仲間と共に作り上げる過程と教師の援助のあり方
2005 (平成 17)	子どもの学びからはじまるカリキュラム ～学びの連続性を見通して～	<全 3 回> 「幼稚園教員の資質の向上と保育設計」～自分の保育を振り返る～ ① 遊びの中の学びを考える 3～科学性の芽生えの視点から～ ② 保育計画の立て方を考える～日々の保育案の考え方・表し方～ ③ 家庭との連携のあり方を考える～気になる子どもについて保護者とどう連携するか～
2006 (平成 18)	子どもの学びからはじまるカリキュラム ～学びの連続性を見通して～	<全 4 回> 子ども理解から保育を考える ① 一人ひとりの子ども理解に基づく援助のあり方～子どもをどのように理解するか～ ② 遊びの中の学び(ビデオ活用による保育の評価)～子どもの事実を

		<p>捉える～ ～子どもの学びをみとる～</p> <p>③ 一人ひとりの子ども理解に基づく援助のあり方～援助の方向性と方法を生み出す～</p> <p>④ 遊びを問い直す～3歳・4歳・5歳にとって 鬼ごっこの面白さとは～</p>
2007 (平成 19)	子どもの学びからはじまるカリキュラム	<p><全3回></p> <p>子ども理解から保育を考える</p> <p>① 一人ひとりの子ども理解に基づく援助のあり方～子ども理解に焦点をあてて～</p> <p>② 遊びを問い直す～3歳・4歳・5歳にとって造形表現の面白さとは～</p> <p>③ 一人ひとりの子ども理解に基づく援助のあり方～援助の方向性と方法を生み出す～</p>
2008 (平成 20)	子どもの学びからはじまるカリキュラム	<p><全4回></p> <p>子どもにとっての遊びの意味を問い直す</p> <p>① 5・6歳合同学習の意味を探る～「いっしょにとろだんごをつくらう」を通して～</p> <p>② 遊びの中の子どもの学びをみとる</p> <p>③ 運動的な遊びの意味を探る</p> <p>④ 発表会でする遊びの意味を探る</p>
2009 (平成 21)	子どもの学びからはじまるカリキュラム	<p><全3回></p> <p>子どもにとっての遊びの意味を問い直す</p> <p>① 身近な自然とかかわる遊びの意味を探る～春～</p> <p>② 遊びの中の子どもの学びをみとる</p> <p>③ 身近な自然とかかわる遊びの意味を探る～秋～</p>
2010 (平成 22)	平成 22～24 年度 文部科学省研究開発学校指定（第 1 年次） 幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法等の研究開発	遊びの中の子どもの学びをみとる
2011 (平成 23)	平成 22～24 年度 文部科学省研究開発学校指定（第 2 年次） 幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法等の研究開発	子どもにとっての遊びの意味を問い直す
2012 (平成 24)	平成 22～24 年度 文部科学省研究開発学校指定（第 3 年次） 幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法等の研究開発 (研究発表会テーマ) 幼小をつなぐ幼児期のカリキュラム「神戸大学附属幼稚園プラン」の創造～10の方向・40の道筋で幼児教育を可視化する～	
2013 (平成 25)	平成 25～28 年度 文部科学省研究開発学校指定（第 1 年次） 幼稚園と小学校の円滑な接続に資する、子どもの学びに着目した、幼児教育と小学校教育9年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる「初等教育要領」の開発	子どもにとっての遊びの意味を問い直す～幼小をつなぐ幼児期のカリキュラム「神戸大学附属幼稚園プラン」にふれて～
2014 (平成 26)	平成 25～28 年度 文部科学省研究開発学校指定（第 2 年次） 幼稚園と小学校の円滑な接続に資する、子どもの学びに着目した、幼児教育と小学校教育9年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる「初等教育要領」の開発	<p><全2回></p> <p>子どもにとっての遊びの意味を問い直す</p> <p>① 遊びの中の子どもの学びをみとる</p> <p>② ごっこ遊びの意味を探る</p>
2015 (平成 27)	平成 25～28 年度 文部科学省研究開発学校指定（第 3 年次） 幼稚園と小学校の円滑な接続に資する、子どもの学びに着目した、幼児教育と小学校教育9年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる「初等教育要領」の開発	子どもにとっての遊びの意味を問い直す

その他、ここ数年、毎年海外からの参観受入を行なっている。今後、幼児教育においても国際的な学び合いの場が必要になってくると考える。神戸大学附属幼稚園においては、長年カリキュラム研究を行っていることもあり、日本の幼稚園のカリキュラムの一例として見ていただいている。海外からの参観者は、具体的なカリキュラム、カリキュラムマネジメントの仕組み、具体的な保育環境と保育実践等関心の幅が広い。このような海外の視察を含めた国内外の幼児教育関係者の受入を行うことができる。